

神の下に生きる人間―中世フランスの聖人伝『聖アレクシス伝』を読む

水野 尚

二一世紀を生きる私たちが何百年も昔の物語を読むことで、何を得ることができるとでしょうか。さらに言えば、そうした物語を読んで喜びを感じるなどあるのでしょうか。これから取り上げるのは『聖アレクシス伝』という聖人伝です。このキリスト教の物語を読みながら、文化の違いを通して私たちが何を読み解いていけるのか考えていきます。その知が発見の喜びにつながるはずです。

聖人伝とはなにか

聖人伝というのはキリスト教の聖人の生涯を語った物語のことで、聖人の祝日や教会の典礼の折に、教会の中とかその前庭などで、一般の民衆に向かって朗読されたり、時には歌われたりしたようです。つまり、聖者伝は、キリスト教を布教するために作られた、宗教的な物語だということになります。

では、聖人とはいったい何なのでしょう？そして、それが一般の人々の心に訴えるものを持っていたのはなぜでしょうか？聖人には大きく分けて二つのタイプがあります。一方は殉教者タイプ。迫害の犠牲になりながら、キリスト教の教えを守りぬいて、殉教していく人間の姿を綴ったものです。もう一つは隠遁者タイプ。人々から隠れ、

ひっそりと神に仕える人間を描いています。その両者とも、キリストの教えをこの世で体現した人々だといえます。

そういった聖人たちは、神と一般の人々を結ぶ絆のように考えられていました。『聖アレクシス伝』の時代、俗世間を生きている人々は、いつでも死後の世界のことを考え、死後天国にいけるよう切望していました。これはもちろんいまでも変わりませんが、しかし現在の科学的な世界観の下では、死後の世界が実在するとは信じられていないように思います。しかし、中世には誰でも死後の世界の存在を信じていたようです。この世が終わるとき、人間は肉体とともに蘇り、生前の行ないの善悪によって最後の審判が下され、善行を積んだ人は天国へ、悪い行ないをした人は地獄に落ちると考えられていたのです。

聖人の霊魂はもちろん天国に昇っていきます。一方地上に残された聖人の遺骨は、「天空界の神的存在が現世に現われたもの」(阿部謹也『西洋中世の男と女』筑摩書房)として、一般の民衆と神とをつなぐ役割を果たしたのです。人々は聖人にすぎること、天国への道を得ようとしたのだと考えてもいいでしょう。

このような背景を考えると、死後の世界を信じている人々にとって、聖人がいかに大きな意味を持っていたかということが理解できると思います。彼らは人間と神との仲介役なのです。

そこで、キリスト教の聖職者たちは、一般の民衆を教化するために聖人たちの生涯を物語り、キリスト教の理想とする生き方を説いたのです。その理想とは、現世を捨てて、神に仕えることです。地上的な富や名声を捨て、ひたすら神の導きにしたがって生きることが、人間の最善の生き方なのです。現在の私たちから見ると、何となく不自然に感じられるこのような価値観が、どうして当時は当たり前前のこととして受け入れられていたのかという問題は、『聖アレクシス伝』を実際に読んでいくとき詳しく考えていきます。

ところで、聖人伝と言っても、具体的な一人の人間の生涯を忠実に描いているわけではありません。それはむしろ理想的な生き方の典型として、キリストの生涯を下敷きにした類型的な構成がなされています。ですから、聖人伝は、しばしば聖なる数三にちなんで、三部構成となっていたと考えられています。その三部とは、(1)神に仕える以前の聖者、(2)神への道に進んでからその死まで、(3)聖者に対する尊敬と奇跡です。(『フランス中世文学集』第一卷、白水社)

聖人伝とは以上のようなものですが、ローマ時代以来ラテン語で書かれ、朗読されたり歌われたりしていました。しかし、時代が下ると、一般の民衆の間ではロマン語(つまり俗語)が話されるようになり、ラテン語が理解されなくなつたので、俗語で記されるようになりました。そのようにして、九世紀の末ごろからロマン語(古フランス語)で書かれた聖者伝が登場するようになったのです。そして、古フランス語による聖者伝の代表が、これから読んでいく『聖アレクシス伝』です。

『聖アレクシス伝』の「あらすじ」

ローマ皇帝の重臣ウーフェミアンには長い間子どもができなかつた。しかし、心を込めて神に祈り、やっと子宝に恵まれる。その子はアレクシスと名付けられることになる。アレクシスが成長すると、父親は子宝に恵まれるか心配して、立派な家柄の娘を嫁として与える。ところが、アレクシスは結婚式が終わると、妻を諭して神に仕えることを説き、その夜のうちに家を出てしまう。そして、聖マリアの像のあるアルシルという町につくと、持っているものをすべて人々に与えてしまい、清貧の生活を送り始める。

一方アレクシスの家出を知った父母と妻の嘆きは大きく、彼を探すために、召使をあらゆる土地に送る。しかし、

ある召使は、物乞いをするアレクシスに出会ったにもかかわらず彼だと気付かず、その搜索は無駄に終わる。

さて、アレクシスの方は、そのような生活を続け、十七年間アルシルの町で過ごす。ところが、十七年目のある日、マリアの像が寺男に、「神の僕を呼ぶべし。」と言い、結局アレクシスが聖人であることが、町中に知れわたってしまふ。人々が自分を崇めに来るのを見ると、「かかる崇敬の的となり、信心の障りとならんも心憂し」と考え、その地を去ることにする。

そこで、船に乗ってタスソスに行こうとする。しかし強い風が吹き、アレクシスを乗せた船は、彼の生まれ故郷であるローマに運ばれていってしまう。そしてそこで、アレクシスは父親に出会い、父の家の階に暮らすことになる。そして、父や母や妻の嘆く声を聞きながらも、自分の身上を隠し続け、そこでまた十七年の歳月を過ごすことになる。

このようにして、三十四年間の苦行の末、アレクシスは重い病に冒され、自分の死ぬべきときが来たことを悟る。そして、羊皮紙に自分の生涯を書き綴り、それを死ぬまで離さないでいる。

同じ頃、ローマでは、都が崩れ落ちるのを防ぐために聖人に祈れという神のお告げがある。そこで法皇をはじめ、二人の皇帝が聖人を探し求める。そして、これも神の声で、聖人がウーフェミアンの家にいることがわかり、死んだばかりのアレクシスを見つけだす。

法皇はアレクシスの手にある羊皮紙を見つけ、彼の生涯が人々の目に明らかになり、アレクシスは聖人として祭られることになる。彼の名を唱えると、どんな病人も病が癒えるという奇跡を引き起こし、七日の間人波が続いて埋葬することができないが、最後にやっと聖ポニファキウス教会に埋葬される。

この聖人伝では、最後に、天国で妻とともにいるアレクシスに言及され、こう付け加えられる。

神よ、この世にかりそめの生を受けしこの聖人

いかに尊き苦悩に耐え、ひたすら神に仕え給えしか

その魂いまは栄光に輝くもむべなるかな

望みしことはみな手に入れたれば、さらに欠くところなく

とりわきて、神の身許にあればなし

(第百二十三節)

聖人伝の世界

このような聖人の生涯を綴った物語は、現在の私たちからするとたいへん奇妙に思えることがあります。私たちが思い描く立派な行いの人間と、ここで描かれているアレクシスの姿が重ならないのです。その一番大きな要素は、聖人といわれながら、家出をして父母や妻を嘆き悲しませ、苦行を続けている部分だと思えます。それも結婚式をすませた当日に家を捨て、旅立ってしまうのです。私たちにはそれが聖人のすることとはとても思えません。

しかし西暦十世紀前後に生きていた人々はこの物語になんの違和感もなく、素直に感動したようです。例えば、十二世紀の末、リヨンの裕福な商人であったヴァルドは、吟遊詩人の歌う「聖アレクシス伝」に深く心を動かされ、突然の回心を感じ、商業によってためた富をすべて放棄して、清貧の生活に入りました。このヴァルドとは、中世最大の異端集団（異端というのはカトリック教会から見てのことであって、ある意味では教会の腐敗を正すために生じてきた運動ですから、一概に異端と呼ばれている運動を否定する必要はありません。）と言われるヴァルド派の開祖です。それほどまでに、この物語が一般の民衆にとっても説得力をもっていたのです。それはなぜでしょうか？現代人の感覚と中世の人々の感覚の間に、どんな違いがあるのでしょうか？ここではまずそういった問題を考

えていくことにします。

「現世と天上」

『聖アレクシス伝』の筋道を頭の中だけで理解するのは簡単なように思いますが。まず先ほど紹介した分類によれば、これは(2)の隠遁者タイプの聖人伝です。隠遁と清貧という福音書の精神を、アレクシスという一人の人物を通して描いた物語なのです。彼は、財産も名声も捨てさり、禁欲に徹し、キリストと同じ三十四年間の生涯を、神カリタスの愛のために生きたのです。

ところで、肉親愛を捨て神の愛を選ぶというのが『聖アレクシス伝』の主題なのですが、そこが現代の私たちの目には奇妙に映る部分ではないかと思えます。私たちであれば、親や妻を捨て神の道に走るのは、どう考えてみても非人間的な行動であり、非難されるべき生き方のように感じられます。それなのにアレクシスが聖人として称賛されるのですから、どうしても素直に納得できないという人がたくさんいます。なぜ肉親を悲しませても神に仕える生き方が、聖職者だけではなく、一般の人々の間でさえ称賛を集めたのでしょうか？

この問題を解決するのは容易ではありませんし、それだけで西欧の思想史を概観しなければならぬほどの大きなテーマです。ですからここで詳しく検討するわけにはいきませんが、なるべくわかりやすく説明するために、二つの世界観を対照的に描いてみたいと思います。その二つとは、「科学的な世界観」と「魔術的な世界観」です。

科学的というのは今の私たちの物の見方ですが、進歩の概念に則しているといってもいいかもしれません。その観点からすると、時間は直線的に前に進み、不可逆的であると考えられ、決して同じことが繰り返されることはありません。そこでは、新しいもの、個別的なもの、一回しか存在しないもの、などに価値がおかれます。そして、

日常的な次元の存在こそが現実的で、人間にとって重要なものであるとみなします。

それに対して、魔術的とここでいちおう呼ぶ世界観においては、普遍的なもの、繰り返し存在するもの、反復するもの、などに重きが置かれます。それはどういうことかというところ、^{マクロコスモス}天上の世界と人間存在が対応していて、この世の人間の人生も、天上の出来事によって決まっていると考えられているのです。例えば、今でも行なわれている星占いを考えてみればよくわかるのではないかと思えます。星占いは、天上の星の配置が人間の運命を左右するという考えに基づいています。つまり、マクロコスモスとミクロコスモスの対応が前提にされているわけです。そして、天上の世界が中心を占め、日常的な世界を決定していると考えられていました。

ということは、科学的な世界観では現世的な面に重点がおかれるのに対して、魔術的な世界観の下では、この世のものとはかなく移りすぎていくものであって、本当の意味で存在しているのは変わることのない天空にこそあると考えられることになります。現世は空しく、真に実在するのは彼岸なのです。そう考えれば、この世の肉親愛を捨て、神の愛を求めるといふ理念は、少なくとも知的には理解可能になるのではないのでしょうか？

しかし、感情的にはやはり納得がいかないのではないかと思います。私たちにはいま生きているこの世界がすべてであって、死後の世界を中心に考えることはできません。他方、十一世紀くらいまでのキリスト教ではこの世の終わりが近いという考え方がずっとあり、人々はつねに死後の世界のことを真剣に考えていたようです。その時代には、平均寿命は三十才くらいであり、幼児の死亡率も五十パーセント以上だったといわれています。死は人々のすぐ身近なところにあつたのです。そのような状況の中では、誰もが死後の世界を思い煩うことも、自然なことだと言えるのではないのでしょうか？

もし本当に死後の世界があり、生きていたときの行ないによって天国に行くか地獄に行くかということが決定さ

れると信じておれば、私たちはどう考えるでしょう。中世の人々と同じように、この世での生き方があの世の価値にしたがって変わるのではないのでしょうか。この世での行ないが悪ければ地獄に行かなければならないとすると、それを気にながら生きていかざるをえなくなります。そのように考えると、アレクシスの行動も多少は理解できるのではないのでしょうか？殊に、『聖アレクシス伝』の中では、最後に妻がアレクシスとともに天上に迎えられ、現世的な愛情があつた世でむくわれるのですから、感情的にもある程度は受け入れることが可能かもしれません。

「結婚」

次に、結婚の問題について考えてみたいと思います。十二世紀には恋愛と結婚が文学の大きなテーマになります。ここでは簡潔に要点だけに触れておきたいと思ひます。

アレクシスは気が進まないにもかかわらず、父の決めた相手と結婚をしますが、しかしその日のうちに家を飛び出してしまいます。それはなぜでしょうか？たぶん現代の読者ですと、父親の決めた相手の女性が入らなかつたとか、父に決められたこと自体が嫌で、結婚生活から逃げ出したのだと考えるかもしれません。しかし、それは現代の人間の感覚であつて、十一世紀の人々の結婚観はまったく違つていたようです。まず、結婚は個人がするものというよりも、家と家のつながりであり、さらには子孫を得るための手段であると考えられていたのです。ですから、『聖アレクシス伝』における結婚の手続きがアレクシスの家出の原因だと考えることはできません。では、なぜ、よりによって結婚式をすませてから、家族を捨ててしまうのでしょうか？

このことを理解するためには、当時の社会制度の中で、結婚がどのような機能を果たしていたのかを知らなければなりません。じつは、このフランス語の聖人伝が語られていた時代には、二つの身分の間で、権力闘争が行なわ

れていました。二つの身分というのは、聖職者と貴族（王族、領主、騎士）です。その戦いの頂点には、ローマ法皇とフランス国王がいました。そして、聖人伝というのは、その名前の通り、聖職者たちが自分たちの教えを広めるために作ったものですから、聖職者の思想が表現されていることとなります。そのことは、『聖アレクシス伝』の中にもはっきりと現われています。物語の終わりの方で、アレクシスが天に召されるとき法皇と二人の皇帝が登場しますが、そこでは明らかに法皇が皇帝の上に位置しています。いかなれば、皇帝は地上の支配者にすぎず、法皇は魂を導く天上の支配者の代理人なのです。

さて、ここで結婚の問題に戻りますが、実は結婚に関する考え方について、聖職者と貴族階級の間には大きな隔たりのありました。ローマからやってきたキリスト教的な考え方と、北方から移動してきたゲルマン民族的な考え方の違いといってもいいかもしれません。そのせめぎあいの中で、聖職者は、離婚しようとするフランスの大貴族や国王を破門にしたりして、自分たちの権力を王権の上に置くことに成功していきました。

ところで、現代の国語辞典を引くと、「結婚とは男女が夫婦になること」といういとも簡潔な定義がなされていますが、私たちはこの結合が一般には愛情に基づくものと考えているのではないかと思えます。たとえお見合いをするにしても、相手に愛情を感じなければ結婚はしないのではないのでしょうか。では、中世の国王や領主たちは、結婚をどのように考えていたのでしょうか？ ジョルジュ・デュビイーは、当時における結婚の役割を以下のように説明しています。

「結婚という習慣が制度化されたのは、男性間に女性が秩序正しく分配されることを保証するためであり、また女性をめぐる男性間の競争に規律をもうけ、生殖を公認し、社会化するためであった。この習慣は、誰が父親であるか名指すことによって、唯一の明確な親子関係である母と子の関係に、もうひとつの親子関係を加えることにな

る。また合法的な結合を他から区別して、そこから生まれる子供に相続人の資格を保証する。すなわち先祖の名とさまざまな権利を与えるのである。結婚は親族関係の基礎を作り、そして社会の土台を築く。社会という建物の要石を形成するのである。」(ジョルジュ・デュビイー著『中世の結婚』新評論)

結婚というのは個人の問題ではなく、社会的な問題なのです。そして、子孫の確保と財産の維持とがもつとも重要なこととなります。結婚は子孫を得るための手段であり、女性はその道具だということになります。そしてここでは、愛情などということはまったく問題にされていないようです。

もう少しだけ具体的に検討すると、まず子孫の確保というのは、二つの側面があります。その一つは、引用では「さまざまな権利」という言葉で表わされていますが、その中心は財産(土地)の維持・拡張ということになります。(この問題については、後にまた検討します。)

もう一つの側面は、上の引用では「祖先の名」という言葉で表現されていますが、血統を維持することです。当時の騎士階級の人々にとって、祖先の勇敢な血を子孫に伝えていくことが中心的な課題であったのです。つまり一人一人の人間は、個人として自立している存在であるよりも、一族という鎖の中の一つの輪にすぎず、自分のところでその鎖を切らないようにすることが、もつとも重要だと考えられていたのです。

結婚して子どもができない場合には、子孫がとだえてしまうこととなります。そのような事態になると、一族が消滅してしまう危機となるわけです。ですから、もし結婚しても子どもができないときにはその相手の女性を交換する必要が出てきます。(ここでも、現代ならば、男性の側に問題があるかもしれないというところでしょうが、当時はすべては女性にかかっていると信じられていたようです。)たとえば、詩人として有名なギヨーム・ダキテーヌや、フランス国王フィリップ一世などは、何回かの結婚と離婚を経験しています。そして、それは愛情の問題

というよりも、子孫のことが関係していると、ジヨルジュ・デュビーは考えています。このように、貴族階級の人々にとっての結婚とは、家門の維持を保証するための制度であったわけですから。

それに対して、聖職者はどのような立場に立っていたのでしょうか？八世紀頃までは、宗教が結婚にかかわることとはなかったようです。つまり、結婚は世俗の事柄であり、聖職者は結婚に介入しなかったのです。しかし、聖職者たちは、結婚を自分たちの領域に取り込むようになっていきます。そして九世紀頃になると、キリスト教的な見地から、世俗の結婚のモラルに異義を唱え始めます。そのころ聖職者が俗人に教えた結婚のモラルは、(1)一夫一婦制、(2)族外婚、(3)快楽の抑制、という三つの掟に要約することができるそうです。

ここで重要なことは、キリスト教のモラルでは、離婚は禁止されることです。これは、貴族階級にとっては大変な問題です。もし家長の夫婦に子どもができない場合、一族が存続の危機を迎えることとなります。そこで、王侯貴族たちは、近親であることを理由として妻と離婚するという手段に訴えていました。そのことに対して、聖職者たちは最初のうちは寛容でしたが、十二世紀頃からは彼らの力が強まり、離婚が厳格に禁止されるようになっていったようです。そこで、離婚に対して、破門の宣告が多く出されるわけです。

さらに興味深いのが、快楽の抑制というモラルです。キリスト教では、初めから、性的活動は悪いものと考えられていました。肉体的な活動をしないまま一生すごすことが、もつとも望ましい人間の生き方なのです。聖職者が俗人の上に立つのも、禁欲に基づいていると考えてもいいかもしれません。「地上において神への奉仕に身を捧げる人々は、天使のすぐ下という最高位におかれる。(・・・)彼らが優位に立つのは、純粹さということに由来するのであった。」(『中世の結婚』)ここで純粹と訳されているのは、純潔ということなのです。

しかし、キリスト教者全員がそういう状態になってしまえば、子孫がいなくなり、ひいてはキリスト教者がいな

なくなってしまう。そこで結婚によって子どもを生むことが、俗人には許されることになるのです。「貴族と農奴の役割は、女に子供を生ませることなのである。」（『中世の結婚』）

ただしそこで、生殖行為において、快楽を感じてはいけないという条件がつくのです。結婚は、姦淫が行なわれるのを防ぐ防波堤であり、人を罪から遠ざけるのだと教えられるのですが、さらに結婚生活においても、快楽を感じれば、それが姦淫になってしまうというのです。これも、今の私たちからすればいふんと奇妙なことに感じられるのですが、実際に教会の中ではこのようなモラルが説かれ、それに従った贖罪規則書まで作られていました（『西洋中世の男と女』）。その中には、夫婦間で性的な行為をしてはいけない場合が、はっきりと定められています。このような表を見ますと、個人的な性の問題にまで教会がいかにかかわっていたかということが、よくわかります。教会のモラルにおいては、夫婦の性生活においても快楽は禁じられ、結婚しても純潔を保ち続けるのが理想的な夫婦であったのです。

結婚に関するこのような二つの立場の争いを通して見たとき、アレクシスが、なぜ結婚式を行ないながら、妻に天国における真実の生を教え諭してた後で家を出ていくのかが明らかになります。つまり、そこには、聖職者と貴族のモラルの葛藤が明瞭になるような状況が描きだされているのです。父親は貴族階級の考え方に従って、アレクシスを結婚させ、子孫を得ようとしています。他方、アレクシスは聖職者の結婚観を体現し、結婚生活を逃れて、隠遁者としての生活を送ろうとします。彼が聖人として崇められるのは、まさに彼が教会の結婚に対する意識を具現化しているからなのです。そして、聖人伝は聖職者たちが俗人にキリスト教の教えを伝えるために語られたわけですから、アレクシスの生き方が称揚されるのは当然だということになります。

興味深いことに、十三世紀にラテン語で書かれた『黄金伝説』の中の「聖アレクシス」では、アレクシスの両親

も彼が生まれた後、「これからは肉の交わりをしないで生涯をおくりますと神に誓った。」という記述がなされています。ですからここでは、聖人であるアレクシスだけではなく、彼の両親まで純潔を守る理想的な夫婦という役割を担っていることになります。結婚生活における快樂の禁止という思想があったことが、ここではいつそう明瞭に表わされています。

以上の検討から、なぜアレクシスがわざわざ結婚の当日に家を逃れ去ったのかが明らかになったのではないのでしょうか。現在の私たちの感じ方ではたいへんおかしく思われることも、その当時の状況に照らしてみると、それがなぜであり、どういう意味をもっていたのかとすることが、少しづつ理解できるはずです。

ラテン語から古フランス語へ

ここまで聖人伝の価値観と結婚にまつわる聖職者と貴族階級の葛藤を明らかにしてきましたが、今度はまず『聖アレクシス伝』が成立した背景を年代的に辿り、次にラテン語から古フランス語に移行するにつれて同じ物語の表現形態がどのように変わっていったのか探っています。

「『聖アレクシス伝』の起源」

アレクシスの物語の起源は、紀元五世紀前半のトルコのウルファ（当時のエディッサ）に生まれた「神の人」の伝説であるとされています。そのエディッサというのは初期キリスト教の伝道基地として栄えた町だそうですから、こういった聖人の物語が作られたとしても不思議ではないといえます。最初はですからシリア語の伝説が作られたわけですが、ここでは聖人はエディッサで清貧のうちに死ぬという物語だったそうです。ですから、古フランス語

の物語からすると前半部分だけしかなかったことになります。

その後、アレクシス伝はギリシアに渡り、登場人物の名前がギリシア風に変えられたのですが、それだけではなく、ローマでの苦行を物語る後半部分も付け加えられました。ですから、後の聖人伝の骨格は、このころ整えられたと考えられています。

しかし実際に西ヨーロッパに伝えられたのは意外に遅く、九百七十七年にローマに亡命したダマスカスの大司教セルギウスが、ローマの聖ボニファッチョ教会にこの伝記をもたらしただけのことになっています。そして、古フランス語の物語の元になったラテン語の物語が作られたのも、その教会の周辺においてではないかと言われています。そのラテン語の散文の伝記については、後で古フランス語のものと比較してみたいと思います。

このように西ヨーロッパに移入された後は、大変な人気を博し、フランス語だけではなく、イタリア語、ドイツ語にも詩的に翻案されて、ひろく読まれました。また、十三世紀に聖人伝を集大成したヤコブス・デ・ヴォラギネによるラテン語の『黄金伝説』にも収められています。

さて、古フランス語の『聖アレクシス伝』の作者はわかっていませんが、十一世紀の中頃に、ノルマンディー地方で成立したということです。

「詩句」

では古フランス語の表現による特色を見ていきたいと思います。十一世紀のフランス語は、現在のフランス語とは非常に違っていますから、現代の言葉の理解だけでは読むことができませんが、韻の関係などありますから、一節だけ古フランス語を書いてみます。(訳は『フランス中世文学集』によります。)

Quant li jorz passet ed il fut anoitier,
 co dist li pedre : " filz, quer t'en va colchier,
 avuec ta spouse, al comant Deu del ciel."
 ne volst li enfes son pedre corrocier,
 vait en la chambre o sa gentil mollier.

日も暮れて ぬばたまの夜ともなれば

父の言う「息子よ 妻と寝よ

天にまします 神の御心のままに」

父を悲しみまするを怖れたれば

子は新妻の待つ部屋へと赴けり

これは『聖アレクシス伝』の第十一節ですが、フランス語の文章を見ていきますと、*ciel* & *chambre*、*gentil*は現代フランス語とまったく同じ単語が使われているのがわかります。また、*dist*などは、*dit*（言う）ではないかと推測がつかます。しかし、*co*や*al*、*co*などまったく違う言葉もあります。また*pedre*や*Deu*などはラテン語の単語の形をとどめる単語も使われています。このように見ていくと、古フランス語というのは、現代のフランス語とラテン語の中間に位置していたことがわかるのではないかと思えます。

ところで、それぞれの行の最後の母音を読んでみるとわかりますが、十一節ではすべての行が、 $\wedge e v$ という音で終わっています。このような終わり方を、半音階あるいは母音押韻 (assonance) と呼んでいます。これは最後の音節の強勢母音だけを一致させる方法で、後に使われるようになる脚韻 (rime) の前の段階を示しています。このように最後の母音の音をそろえることで、吟遊詩人が物語を覚えるのがやさしくなったり、歌いやすくなったりしたのではないかとされています。

また、一行は十音で綴られています。このような十音綴詩句は中世にたいへんよく使われた形で、次に検討する武勲詩なども十音綴詩句で書かれていることが多いようです。そして、『聖アレクシス伝』では、一行十音の詩句が五行あつまって、一つの節 (strophe) を形作っています。ですから引用は、一節すべてを挙げたことになりません。

「文学言語としての古フランス語の誕生」

では、古フランス語で書かれた『聖アレクシス伝』は、そのもととなったラテン語のテキストと比べて、どのような特長があるのでしょうか？アウエルバッバの有名な『ミメーシス』という本の中で、その比較が行なわれています。ですから、その研究を参考にして、十一世紀になってようやく文学の言葉として成立しはじめた古フランス語の表現を検討していきたいと思えます。まず初めに、アレクシスが寝室の中で妻を諭し家を出ていく場面について、ラテン語のテキストと古フランス語のテキストを引用していきます。

ラテン語のテキスト

夜になるとエウフェミアヌスは息子に言った。「息子よ。寝室に行きなさい。そしてお前の妻を訪ねなさい。」しかし、気高いキリストの知恵に充ちた若者は、部屋に入ると彼の妻を教えさとし、多くの聖なる事柄について話しはじめた。それから彼女に金の指輪と絹の緋布にまいた剣の留め金とをわたして言った。「これらのものを神の意にかなうかぎり末ながくしまっておきなさい。そうすれば、神はわたしたちの間にいつもおられるでしょう。」それから彼は、自分の貯えをもつて、海の方へ降りて行った。

(アウエルバッバ『ミメーシス』筑摩書房)

古フランス語のテキスト

十一

日も暮れて、ぬばたまの夜ともなれば

父の言う「息子よ、妻と寝よ。

天に座します、神の御心のままに」

父を悲しみまするを怖れたれば

子は新妻の待つ部屋へと赴けり。

十二

アレクシス殿、伏床を見やり、乙女を見れば、

忽ち思ひは、天に座します主に及ぶ。

それぞなべての室にまして、尊いお方。

「おお神よ、何たる大罪わが身に迫りしことぞ。

今にして遁れざれば、主を見失わん事を恐るるのみ。」

十三

アレクシス殿は、乙女に語り給う。

この世の生をば、激しく難じ、

天国の真実まことの生を、誉め称う。

されど心は一向ひたすらに、遁れ去ることのみぞ願いたる。

十四

「聞け、乙女子よ、尊き御血でわれらを贖い給いし

御主をば、夫つまとせよ。

うつせみのこの世には、全き愛はなく、

生命はかなく、永らうる誉れとてなし。

この世の喜びも、大いなる悲しみに変わらうぞ。」

十五

諭すべきほどのことをば、述べたれば、

アレクシス殿、佩刀の輪と指輪を託し、

神に妻を委ねたり。

急ぎ父の館を、立ちいでて、

夜陰に紛れ、己が故国を逃れ去る。

十六

一向ひたすらに道を急ぎ、海辺に到れば、

乗合あはわすべき船の、はや彼を待ちいたり

(・・・)

この両者の比較から明らかになるのは、ラテン語の文章が事実をたんと述べているのにすぎないのに対して、フランス語の物語では、感情の動きがかなり明瞭に表現されているということだ。アウエルバッハはこう述べています。「(ラテン文では)すべてが平板で、一本調子で、変化に乏しい。(・・・) 人間的な感動に乏しく、(・・・) 生命の動きが感じられない。この詩は民衆の言葉(古フランス語)に訳されてはじめて個々の画面に起伏ができ、人物にも人間味と生命がそなわったのである。」(『ミメーシス』)

実際、フランス語のテキストを読むと、直接話法が多く使われ、アレクシスの内的な葛藤も描かれています。特に第十二節など、床の方を見れば、そこには妻が彼を待っています。その誘惑を振り切るように神のことを考え、「今にして遁れざれば、主を見失わん事を恐るのみ」と、自分の決心を固めるアレクシスの様子が描かれています。このような苦しみの表現はラテン語の文にはまったく見られないものです。儀式のためのラテン語ではなく、日常生活の中で使われているフランス語よって語られることで、聖人が人間的な姿を取るようになったという指摘は、二つのテキストを比較して読んでみると、大変に説得力があります。日常の言葉(フランス語)が、人間を人

間らしく描くことを可能にしたのです。

同じような例は、アレクシスがローマの町に戻ってきたときの記述にも見られます。そのとき、聖人は人間的な弱さを垣間見せます。そして、神に向かって、「御心に叶わば、この地には来とうはありませんだ。」(第四十一節)と自分の苦しみを打ち明けます。このような内的独白は、ラテン語の文にはなく、古フランス語の物語になって初めて付け加えられたものだそうです。このことから、ラテン語から古フランス語への移行に伴って、人間的な感情が素直に表現されるようになったかということが、よくわかるのではないかと思えます。

そのような観点から、フランス語で書かれた『聖アレクシス伝』を読んでいくと、聖人としてのアレクシスの姿が美しく描かれるのと平行して、父母や妻の嘆きが生々しく描かれているのに気付きます。例えば、アレクシスを探しに行った召使が戻ってきた後、アレクシスの母親は悲しみのために、これからは自分も安逸を退けようと決めます。古フランス語で綴られたその嘆きは、私たち現代人の目から見ても人間的で率直な感情の表現になっています。

二十七

「わがアレクシスよ、そなたを孕みしは何故ぞ。

そなたは妾の許を去り、妾は苦しみ暗れまじう。

いず方へ、いずれの国に尋ねゆけばとて、

妾はただ一向に迷うばかり。

父御ともども、心楽しむことはありませんまいぞ。」

二十八

悲しみに胸ふたがれて、臥所ふしどに到り、

母親は一物もあまさず、臥所の調度を剥ぎ取りて、
絹の壁掛け、飾りの品にも及びたり。

母親は、深く悲しみ嘆きつつ、

その日より、歡を尽くすことはなかりき。

二十九

母親は嘆きつつ「臥所よ、美々しく飾られて

愉樂の行なわること絶えてありますまいぞ。」

賊兵の略奪さながら、打ちこぼち、

そのあとに粗布と、やぶれ幕とばりを張り回らし、

大いなる善美は、深き憂愁へと変えられたり。

ここでは、母親の度を越した激しい嘆きに驚いてしまうくらいなのですが、それでも以前に見たラテン語の引用からはほど遠いところにいることに注目しなければなりません。一方は聖人の姿を理想化して、それだけをたんと綴っているのに対して、ここにはその聖人の生き方が理解できず、素直に苦しみ、嘆き悲しんでいる人間の姿が、鮮明に浮き彫りにされているのです。そして、このような嘆きの言葉を読んでいますと、中世においても一般

の人々は、頭では現世での生のはかなさや天国での至福を理解しながら、やはり日常生活に生き、この世での愛情を素直に感じていたということが実感できます。

ところで、この時代の言語活動は、ラテン語と地方語（古フランス語）という二重の構造をもっていたわけですが、一方が公用語であるのに対して、他方は日常的に使われる卑俗な言葉でした。そして、その二つの言葉にはそれぞれの役割があったのではないかと考えられています。

国境を越えた学問的な知識の伝達にはラテン語の力が大きくかかわっていました。ラテン語が共通語として存在していたために、ドイツやイギリスの学者や学生がパリの大学にやってきたとしても、なんの問題もなかったのです。しかし、そういった公用語の世界は、やはり建て前的なことからの表現になりがちではないかと思えます。十三世紀の『黄金伝説』に収められているラテン語の『聖アレクシス伝』でも、フランス語のものに比べると、肉親の悲しみにはそれほど焦点が当てられていません。そこでは、教会の公式の見解が、確信をもって表現されているだけです。

それに対して、フランス語は人々が日常に話す言葉であるだけに、人々の生の声が反映しているのではないかと考えられます。たとえ聖人の物語にせよ、それは多くの場合俗人に向かって語りかけられるわけですから、本音の部分が必要になってくるのではないかと思えます。肉親を失った悲しみが赤裸々に描かれ、その上で地上的な嘆きや聖人の賛美に変わるような物語こそが、聴衆の心を捕えたのではないのでしょうか。俗語のテキストには、一般の人々の生の声が響いているのです。

そこで、この聖人伝の中の頂点ともいうべき、アレクシスがなくなった場面を見てみますと、大変に興味深い点

に気がつきません。アレクシスは、聖人ですから、もちろんキリスト教的な「よき死」を迎えます。彼の死は、「聖（ひじり）の道心に報い給わん」（五十六）として神によって与えられたものであり、「永年仕えまつりし、主の御許に身罷」（六十七）ります。しかし、彼がこの世を離れていくときの様子は、ほとんど描かれていないといつていほど簡潔にすまされています。

それに対して、彼の死を受けとめる肉親の悲しみや嘆きの声には、びっくりするほどの多くの行が費やされています。父親の嘆きは七十八節から八十四節までの七節。母は八十五節から九十三節までの九節。妻の様子は九十四節から九十九節までの六節。合計二十二節が費やされて、アレクシスの死を嘆く肉親の感情が表現されているのです。

ここでは、悲しみのありさまがもつとも痛切に歌われているアレクシスの母親の嘆きの声に耳を傾け、この聖人伝の中で人間的な感情がいかに生々しく描かれているか、見ていきたいと思います。

八十五

父親の悲しみ嘆く声の、あまりに大きければ、

母親また、それを聞きつけたり

さながら狂える女のごとく、両の手を打ち

喚き叫び、髪振り乱しかけ寄りて

子の変わり果てたる姿を見るや、氣を失いて倒れ伏す。

八十六

母親、大いなる悲嘆に身を任せ

己が胸を打ち、地面に打ち伏し、

髪搔きむしり、われとわが顔に爪を立て、

わが子をかき抱き、頭を胸に押し当てる

その有様に、涙せざる者あらば、それぞ非情の者ならん。

八十七

髪搔きむしり、胸を打ち、

われとわが身を、責め苛なみて、

「わが子よ、そなたはかくまで妾わらわを憎みたるか。

不幸にも、妾は何と言たりしか。

会あひみ見たることなき者のごとく、そなたを身知らざりき。」

八十八

母親、さんぜんと涙流し、喚おめき叫びて、

ひたすら悲嘆にくるるばかり、

「愛しき息子よ、そなたを身籠りしが不幸もとの因。

この母を憐とは思わざりしか、死を望むこの母を見て、

憐れみの心発せざりしは、不思議の事と言いつべし。

八十九

妾は何たる不幸の女、辛^かき運命なるかな。

今やわが子孫も死に絶え、

長らく待ち望みしものを、今は痛ましき事となり果てぬ。

何故にそなたを身籠りしか、何たる不幸の女。

心の臓の、張り裂くるなきはげに不思議やと言わん。

九十

アレクシスよ、高貴なるこの一門を捨て去りし

そなたは、げにむごい者よ。

せめて一度なりと、心を開きて打ち明ければ、

そなたの不幸は母も、心慰みたるらんものを、

これほどに報^{むく}つたなき女を、息子よ、喜ばしめたらんに。

九十一

息子アレクシスよ、そなたの柔肌よ。

若き身空を、いかばかりか辛^かき境涯に置きたりしか。

何故に妾を捨てて去りしや、そなたを身籠りたるはこの腹。

この苦痛、神これを知り給うべし。

男にても、女にても、もはや妾を慰むる者はなし。

九十二

そなたを見るまで、いかばかりそなたを望みしか。

そなたの生まれ来るまで、いかばかり不安なりしか。

生まれたるそなたを見たる時の、いかばかりか嬉しかりしか。

今ははや、はかなくなりて、妾は悲嘆に暮るるのみ。

妾の死の、訪なわざるこそ、げに憂きことなれ。

九十三

都ローマを統^すべ給う方、神の愛に免じ憐れみを賜^たび給え。

息子の死を悼みて涙する、この妾を助け給え。

この身にふりかかりし、苦しみのいと深く、

わが心、その痛手より立ち直りうることはなからん。

さこそあらめ、他に娘も息子もなければ。

この引用では、息子に先立たれる不幸を嘆く母親の悲しみの感情が率直に表現されています。まず始めの部分では、最後まで自分の身元を打ち明けることもなく、こつそりと死んでしまったアレクシスに対する恨めしさが語られます。しかし、徐々に自分の悲しみから離れ、辛い生涯を送り通した子供にたいするいたわりの言葉に変わっていきます。そして最後にまた、息子の死を堪えがたく思う母親の絶望に戻ります。この嘆きの言葉は、そのままの形で、現代の私たちの心を打つように思います。

古フランス語で書かれた『聖アレシス伝』は、聖職者の説く宗教観を明確に描きだしながらも、その一方で俗人のありのままの感情も反映しているのです。そして、このように、人間の感情を見事に表現しようという事は、これまでラテン語に従属し、言葉として十分な表現力にとほしかったフランス語が、最初のフランス語の文章であるといわれている「ストラスブルクの誓約」から約三百年を経て、文学的な言語にまで成熟したことを表わしているのではないのでしょうか。

中世の宗教画を見てもわかるように、聖人伝で描かれる世界の中でも、神の価値が絶対的であり、人間は神の前の小さな存在と捉えられていました。しかし、そうした中で、『聖アレクシス伝』では、人間的な感情がくつきりと描き出され、人間的な価値の向上がはつきりと確認できます。そのような読みとりができたとき、私たちは、異なった文化を背景とした物語を通して、未知だった文化と出会い、そこに生きる人間の素直な感情の表出にふれることで、大きな喜びを得ることになるのではないのでしょうか。